

ヨーロッパ都市のパブリックスペースにおけるアーバンファニチャー等の 造形物及び最新の照明デザイン状況の調査・研究

Research of urban furniture or art work in the public space and research of recent lighting design in Europe.

生活環境デザイン学科

安 齋 哲

Tetsu Anzai

1. はじめに

筆者は平成30年8月27日から平成31年3月12日まで、九州産業大学国外研修助成を受け、オーストリア共和国チロル州インスブルックにあるインスブルック大学建築学部にて客員研究員として198日間滞在し研究する機会を得た。主な滞在先はインスブルックで、ここを拠点としてヨーロッパ各所を巡った。主な研究テーマは「ヨーロッパ都市のパブリックスペースにおけるアーバンファニチャー等の造形物及び最新の照明デザイン状況の調査・研究」である。

2. インスブルック市について

オーストリア共和国の位置する中央ヨーロッパは宗教・政治のみならず、音楽、絵画、建築などにおいてイタリア、スペインなどと並び中世からのヨーロッパの文化の発展において重要な地域であり、近世および近代においてはハプスブルク家の権勢のもとで多様な芸術文化が発展し、また19世紀末においては首都であるウィーンは世紀末芸術の花開く大都市であった。インスブルックも14世紀のハプスブルク家支配下の時代から大きく発展した。インスブルック市はウィーンの西方約450kmに位置するチロル州最大の州都であり、市の面積は104.91km²、標高574m、2017年で人口約13.22万人の都市である。インスブルック市は東西方向に二列平行に伸びるアルプスの山々に挟まれており、谷間に流れるイン川に沿って形成されている。北方はドイツ、西方はスイス、リヒテンシュタイン、南方はイタリアと複数の国に挟まれており、昔からヨーロッパ各所をつなぐ交通

の要所でもあった。主要な言語はドイツ語である。気候は夏は湿度が低く比較的穏やかで冬は12月から2月にかけては頻繁に雪が降り積もるが、谷間の地形の風のおかげで晴天の日の多い、全体的には大変穏やかな気候の土地である。冬季は良質の雪が近隣の山に降り積もり、ウィンタースポーツの盛んな土地である。かつては2度冬季オリンピックが開催された。⁽¹⁾街の中心部は11世紀からの建造物や中世、近世の街並みが美しく残されており、イン川とノルトケッテ連峰の美しい風景を背景とした風光明媚な景観が世界中から多くの観光客を魅了し集めている。重要な観光ポイントであるノルトケッテ連峰のハーフェレカーへは市内からケーブルカーを乗り継いで、老若男女誰でも容易に頂部まで到達することができ、この土地の美しい景色を満喫することができる。(図1) このケーブルカー及び曲線が美しい個性的なデザインの駅舎4駅は、2020年東京オリンピックにおける新国立競技場設計コンペの最初の優勝者でもあるイラク人の女性建築家ザハ・ハディド氏のデ

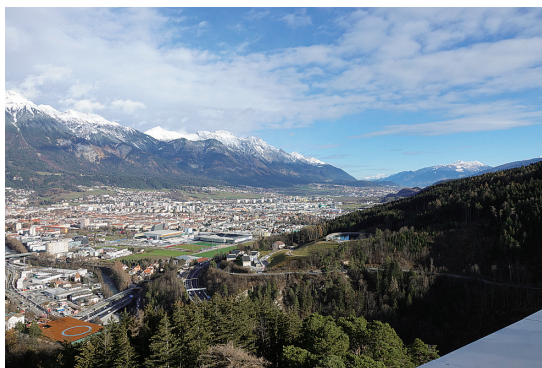


図1 ノルトケッテ連峰とインスブルック市

ザインによる。インスブルック市南部には同じくザハ氏のデザインによるベルクイーゼル・スキージャンプ台施設もある。(図2) 市内の中心広場も兼ねているマリア・テレジア通りに面したラートハウス・ガレリアはフランス人建築家ドミニク・ペロー氏の設計により旧庁舎を現代建築とうまく融合して改修し再生している。カウフハウスのショッピングセンターはイギリス人建築家デビッド・チップパーフィールド氏の設計による周囲の歴史的建物との調和を考慮したシンプルなデザインの現代的な建築物である。(図3) 中世からの歴史的建造物を市内中心部に多数保存活用するとともにこのような最先端の建築デザイン作品も要所に配置しており、歴史を大切にすることでなく、未来に向けてまちづくりが行われていることをここでは実感することができる。⁽²⁾

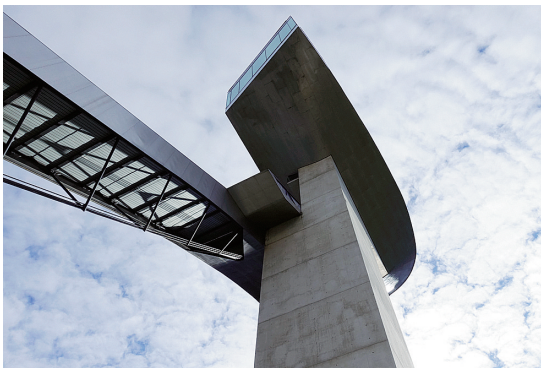


図2 ザハ・ハテイド氏デザインのスキージャンプ台



図3 歴史的街並みに並んで建設されている現代建築

3. 「ヨーロッパ都市のパブリックスペースにおけるアーバンファニチャー等の造形物及び最新の照明デザイン状況の調査・研究」についての報告

3-1. 研究の背景・目的

近年ヨーロッパにおいてアーバンファニチャーは、近年の建築物のデザインや新しいタイプのパブリックアートなどの造形との対応や影響が見られるものが各地で多数実現されている。また、昔ながらの歴史的景観と新しい都市施設との融合の優れた事例も多数実現されている。我が国において、街路、広場、公園等のパブリックスペースに関しては法的な規制が多く、活用の仕方に関する住民市民とのコンセンサス形成の方法についても模索中という状況にあると言えるが、今後より成熟した市民社会を物理的都市空間という形で実現していくことが豊かなまちづくりに不可欠になると予想される。そこでこれらに関してヨーロッパ各地での先進事例の現地調査を行った。また、同時に夜間の都市景観を形成する上での演出照明というものも今後ますます重要になると考えられる。そこでヨーロッパにおける最新の照明デザイン等の事例も合わせて調査した。今回の調査は事例を実地に体験することをまず目的としており、その際の記録、文献資料等を合わせて今後さらなる分析評価を行うための基礎的な調査である。

3-2. 研究の方法

本研究ではインスブルックを主とした滞在地とし、ここを拠点としてヨーロッパ各地を訪問し先進事例を実地調査した。その他現地で入手できた資料、書籍資料、関連するWeb Siteなどを参考資料とした。本研究のために訪問したのは、メトロポール・パラソル(セビリヤ)、CityLoungeシティ・ラウンジ(ザンクト・ガレン)、Befreiungsdenkmal und Landhausplatz解放記念碑とランドハウスプラッツ(インスブルック)、ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展2018(ヴェネチア)、Kreative sitzweise創造的な座り方(ハル・イン・チロル)、

カーニバル・ファウンテン(バーゼル)、インターセクション(バーゼル)、GLOW・ライト・アート・フェスティバル(アイントホーフェン)、アムステルダム・ライト・フェスティバル(アムステルダム)である。実地調査期間は2018年9月から2019年2月までである。

3-3. 本論の構成

本論考においては「アーバンファニチャー等の造形物」と「照明デザイン」の二分野を研究対象としている。両方とも「都市のパブリックスペース」において多くの市民、観光客等に利用されることが期待される施設や現象として、今後さらに重要性を増すと期待される分野であると考えられる。これら二分野をそれぞれ別の章立てで論じることとする。

まずアーバンファニチャー等の造形物に関しては、収集事例を広場的施設事例、ストリートファニチャー的事例、パブリックアートの事例の3つのタイプに分類した。これらの分類ごとで合計8事例を分析評価した。次に照明デザインに関しては世界的に知られる大規模なライティング・フェスティバル2事例についての分析評価を行った。

3-4. アーバンファニチャー等の造形物の事例の報告および評価

3-4-1.

広場的施設事例1

名称：メトロポール・パラソル

設計者・デザイナー：ユルゲン・マイヤー・H

ロケーション：スペイン、セビリヤ、エンカルナシオン広場

施設タイプ：公共広場、展望施設、市場、博物館などからなる複合施設

概要・特徴：セビリヤの旧市街エリアの中層建築が密集したエリアのエンカルナシオン広場にある。広場は階段を登る2階レベルが中心（見学時は補修工事のため閉鎖中）。遠方からも容易に認識できる特徴的なキノコ型の巨大な屋根が特徴。屋根のレベルにエレベータで登ることができ、市内

を一望できる展望台にもなっている。その一部はカフェもありまた散歩できる歩道もある。市内中心部には高層の建築物は存在しないため、ここが旧市街エリアを一望するのに最適な展望施設になっている。屋根はほとんどが巨大な木製の格子で、屋根というよりもルーバーの役目を果たし強い日差しを遮ることに役立っている。

この広場はカフェやレストラン、土産物屋などの入る歴史的建造物で周囲を囲まれており、この構造体の巨大さと造形は周囲の建物と比べると明らかに異質であるが、不思議と周囲になじんでおり、早朝から夜間まで地元住民や観光客の賑わいを盛り上げているように見える。造形は現代的あるいは未来的とも言えるが、構造の主材料は木材（合板に明るいナチュラルな木材の色で塗装が施してある）であり、大胆な造形とともに構造と材料における挑戦的な試みを行っていることも、この建築物の魅力であり、それが旧市街の景観に収まることで、世界的にも例を見ない魅力的な景観をつくりあげている。広場の下の一階部分は食肉、魚介、野菜、加工食品などの市場やカフェが入っており、市民の日常の食生活等と身近な施設になっている。地下は展望台への入場口、施設グッズなども販売する土産物店、そして等施設建設時に発掘されたローマ時代の遺跡を見学することができる博物館になっている。(図4) (図5) (図6) (4) (5)



図4 メトロポール・パラソルの大屋根、セビリヤ、スペイン



図5 メトロポール・パラソルの屋上展望遊歩道



図6 メトロポール・パラソル地下1階の遺跡博物館

評価：2階の広場が閉鎖中で人々の活用の様子が観察できなかったことは残念であるが、周囲を囲む街路や小さい広場、そこに面するカフェなどの人出と賑わいは楽しく、市場、博物館、展望台など、地元住民と観光客双方にとって役立ち魅力的な施設計画がなされており、エリアの再開発コア施設として十分成功している。木製格子の大屋根の存在感は遠方からのランドマークとしても機能しており、観光マップ、観光商材等にイラストや写真でも載せやすく、セビリヤの美しい歴史的建造物や町並みという落ち着いた魅力のイメージに加えて先進的なイメージとして対外的にアピールできる際立った特徴を持つ施設と言える。かなり大規模なエリア再開発の施設であるため、事業規模はかなりのものであったと推測される。

広場の施設事例2

名称：City Lounge “The Red Square”シティ・

ラウンジ「赤い広場」

デザイナー・アーティスト：Pipilotti Rist and Carlos Martinez

ロケーション：スイス連邦共和国、St. Gallen

ザンクト・ガレン

施設タイプ：公共広場

概要・特徴：スイス東部の都市、ザンクト・ガレンの、駅と旧市街の間の主に20世紀後半から最近にかけて整備されたオフィスビルなどを中心とした市街エリアの一部を、「赤色」で覆うというシンプルな手法で屋外のリビング・ルームともいえる特徴的な広場として再生させている。デザインは著名なアーティストのPipilotti RistとCarlos Martinezによる。自動車の大きさ形をもつオブジェ、ソファやテーブルの大きさ形のオブジェなどが所々に配置され、それらもすべて同じ素材、同じ赤色のゴム状の素材で覆われて床面と一体になっている。広場の上部には歪んだ球形の風船の



図7 シティ・ラウンジ「赤い広場」のエリアを示す地図看板

ような物体がやはり所々に吊り下げられて、ほかの空間との差別化に役立っている。これらは夜間は照明オブジェとしてカラフルな光を放っている。(図7) (図8) (図9) ⁽⁶⁾

評価：20世紀後半の近代的な都市計画と建築デザインで構成された市街地はヨーロッパにおいても多くの都市にあり、特徴が少なく魅力に乏しいことも多い。そのようなやや中途半端とも言える印象の都市空間に「赤い」色でいきなり覆われたエリアが出現することで明らかに異質な空間に変化させ活気づけている。広さも広場と言えるだけの面積があり十分と感じられる。広場に変えているとは言え、既存建築物を撤去することなく既存の道路を広場的スペースに変換している。自動車型のオブジェには子供が乗って飛び跳ねたり遊ん



図8 赤い色の自動車型の造形物、子どもたちが遊んでいる



図9 赤い色のソファや巨大な花瓶のような造形物、カラフルな照明オブジェなどにより広場が街のラウンジになっている

だり、人々に楽しんで受け入れられているようである。上空に浮かんだ照明オブジェも空間の異質化に役立っており、特に夜間発光するのは効果的である。赤い素材は道路工事などで通常使用されるゴム系のマテリアルで多少の退色は見られるものの、特殊な素材ではないためメンテナンス性もよく、持続性も考えられている。駐輪駐車スペースは地面に描いたグラフィック記号で示され、楽しい雰囲気アップに寄与している。全体的にかなり少ない改修、要素の追加でとても大きな効果を出している。その点においてもアーティストの発想が優れていることが感じられる。

広場的施設事例3

名称：Befreiungsdenkmal und Landhausplatz
解放記念碑とランドハウスプラッツ

設計者・デザイナー：Jean Pascau;
LAACArchitekten, Stiefel Kramer Architecture,
Christopher Gruner

ロケーション：オーストリア共和国、インスブルック

概要・特徴：第二次大戦後にフランスとオーストリアの協力の証として建造したネオ・クラシズム様式の解放記念碑が置かれている広場が市内の中心部にあるが、表通りや旧市街からも近接地にありながら街のやや裏側という位置にあり十分活用されていなかった。2011年にこの広場の再開発が行われ、記念碑は残したまま、広場はスケートボードなどのスポーツ活動ができる運動広場に改修された。広場地下には市の駐車場があり、斜路の出入り口の形状に合わせた起伏や、記念碑、そのほかのエレメントや周辺との見え方などを意識したなだらかな起伏をあちこちに設けている。インスブルックではウィンタースポーツ等スポーツ活動が盛んなこともあり主に子どもから若い人たちが集まり、スケート技術などを鍛えながら楽しんでいる。(図10) (図11)

評価：この場所の特性をうまく読みこんだ再開発であると感じる。歴史的記念碑や広場を取り囲む

歴史的建造物を綺麗に再生しながら、ほかの周辺建物には斬新なデザインのファサードを付け加えることで、曲面で構成されている特徴的で現代的なスポーツ広場とのバランスを取っている。大変開放的な広場となっているため明るく、スポーツとしては怪我なども伴うスケート系をターゲット



図10 曲面のスロープのある広場で遊ぶ人たち



図11 スケート広場の説明ための看板

としていながらも十分安全な印象に作られており、主に小さな子どもから20代の人たちまでが楽しめる広場になっている。この広場は高齢者向きではないが、建物1ブロック隔てて高齢者や観光客で賑わう市の中心広場を兼ねたマリア・テレジア通りがあるので、利用者の住み分けはかえって好都合であるように見える。誰にも開かれた公共広場であるにも関わらず利用者ターゲットを思い切った絞り方をしている事例として大変興味深い。インスブルックをはじめとしてヨーロッパ各都市では公共広場や集合住宅に囲まれた広場などの地下を利用して駐車場に活用している事例が多く、この広場も広い地下駐車場が設置されている。

3-4-2.

ストリート・ファニチャー的事例1

名称：ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展2018の事例（中国ブース）

設計者・デザイナー：Philip F. Yuan

ロケーション：イタリア共和国、ヴェネチア

概要・特徴：中国のPhilip F. Yuanチームのデザインによるプラスチックを使ったデジタル・ファブリケーションで制作されたベンチとシェルター。屋外で長期間にわたって展示されている。デザインをコンピューター上で行い、それを大型の3Dプリンターでそのまま出力している。構造エレメントは直径10mm程度の透明な樹脂素材でそれを3次元的に網を作るように立体化して自立する柱や壁から屋根のように覆う部分などを連続的に作り上げている。ベンチは同じ素材を細長く束ねて面状にしているが、コンピューターで生み出したやわらかな曲面で構成している。デザインのテクノロジーと製作のテクノロジー両方とも最新の技術を駆使しており、通常の方法では実現が難しい、あるいは不可能な形状を生み出しているところが魅力である。（図12）（図13）⁽⁷⁾

評価：世界的に知られている建築デザインの展示会というお祭りの場での作品であり、実用の手前



図12 デジタル・ファブリケーションにより設計製作された屋外シェルターとベンチ



図13 ベンチの詳細

の実験的な作品である。デザイナーは中国の建築家で最新のデザイン手法、制作手法を駆使しており、このような展示にふさわしい未来への可能性と意気込みを感じさせる作品である。造形としてもユニークかつインパクトがある。

ストリート・ファニチャー的事例2

名称：ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展2018の事例（ベトナムブース）

設計者・デザイナー：VTN Architects ヴォ・チョン・ギア

ロケーション：イタリア共和国、ヴェネチア

概要・特徴：ベトナムの建築家VTN Architectによる竹を全面的に使用したパーゴラ建築。ヴォ・チョン・ギア氏は多数の竹の建築で知られている建築家である。竹は自然素材で軽量、材料調達も比較的容易、建設も容易かつ大規模な工事が不要、

拡張や移動も容易などの特徴が挙げられる。制作方法はシンプルに竹を縛って束ねるというローテクでありながらユニークで安定した、しかし斬新な形態を作り出している。（図14）⁽⁸⁾

評価：日本においても竹は身近で調達の容易な素材であり、建築物のライフサイクル全体で考慮して消費される資源やエネルギーが低く抑えられる建設手法として注目に値する。この作品はシンプルな考え方の造形の組み合わせだが、素材感や構造により他にない魅力を作り出している。伝統的な自然素材を使用しながらも新鮮な空間体験を伴う造形を提示している。この点に大きな可能性を感じることができる。設置場所や使用の仕方についても様々な場所やケースで応用が可能と思われる。



図14 竹を主材料とした日よけシェルターの構造物

ストリート・ファニチャー的事例3

名称：Kreative sitzweise創造的な座り方

設計者・デザイナー：不明

ロケーション：オーストリア共和国、Hall in Tirol

概要・特徴：インスブルックの約5km西方にある街のHall in Tirol（ハル・イン・チロル）を見学中に、街中のいたるところに同じ形状の簡易なベンチが異なるデザインやペイントで多数設置されているのを見つけた。（図15）興味を持って調査をしているうちにポスターパネルを見つけた。それによると「Kreative sitzweise創造的な座り方」というタイトルの企画イベントで、街の中心



図15 ハル・イン・チロルの街とベンチ

部の商業エリアに、各店舗などがそれぞれのお店のイメージなどを反映させたデザインを共通の形態のベンチの表面に施してお店の前の街路に設置している。それぞれの絵柄は店の商品を描いたもの、ショップイメージを表現したものなどが主で色や柄に特にルールはなさそうであった。多くはデザイン事務所が関わりプリントか印刷で仕上げられているが一部には手書きのものもあった。ショップだけでなく教会やアーティスト制作の展示のものもあった。調査中に街の人々が座ったり横になって使用している様子が見えた。このイベントの期間などの情報は不明である。(図16)(図17)

評価：街の中心部は石造の建物と街路でできた歴史を感じることもできる美しい街並みである。インスブルックほどの知名度はなく観光客は決して多いと言えない街で、落ち着いた良さがあると



図16 ベンチ・デザイン・イベントの案内看板



図17 旧市街の路上に置かれる様々な絵柄のベンチ

もに静かすぎる印象もある。そこに合板で作られた軽快でカラフルな仮設のベンチが点々と存在することで、街の景観を損なうことなく活気が生まれている。また、ベンチという休憩やコミュニケーションに役立つ道具であるため、実際に人々が使用し受け入れられている。店舗などの参加者にとってもPR、居場所の創設などのメリットがあり、一つのベンチの表面デザインのみなので参加しやすいイベントであると感じる。地域の一体感を生み出すことができ、比較的小さな街にふさわしいイベント企画であると感じる。

3-4-3.

パブリックアートの事例1

名称：フンガーブルクバーンの駅舎

デザイナー・アーティスト：ザハ・ハディド

ロケーション：オーストリア共和国、インスブルック

概要・特徴：インスブルックの観光名所であるノルトケッテ連峰のハーフェレカーに登頂するための公共交通として、インスブルックのコンGRES駅からフンガーブルク駅に向かうケーブルカーとフンガーブルクバーンの4つの駅舎を、世界的に著名な建築家のザハ・ハディド氏が設計した。これらは駅舎入り口の屋根の役割を持つ構造体であるが、他の建築物とは際立って異なる外観を持つため、これら自体がインスブルックの観光名所の一つとなっている。大きな建築物ではないが周囲の自然や伝統的な形態の落ち着いた建物の雰囲気

と対比されるような大胆で未来的造形が大変目を引く。ケーブルカー本体もザハ氏がデザインに関わっている。(図18) (図19)

評価：建築物であるがきっちりと内部空間を隔てていないシェルターであり、その造形と存在感はパブリックアートと分類しても良いと思われる。作品が広く知られており地域の観光などに寄与している点、山頂という観光名所への出発点として気持ちを盛り上げる役割を果たしている点、遠方からも一目でわかる特徴的形態を持っている点、建築物として施工のレベルも高く完成度が高い点など、建築造形分野で明らかに先進的な事例として評価が高く、同時にパブリックアートとして十分な役割を果たしている。

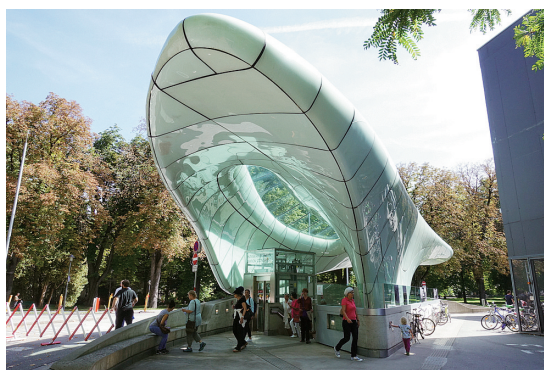


図18 コングレス駅の地下の乗車口への入り口シェルター



図19 フンガーブルク駅の入り口シェルター

パブリックアートの事例2

名称：カーニバル・ファウンテン（ティンゲリー

の噴水）

アーティスト：ジャン・ティンゲリー

ロケーション：スイス連邦共和国、バーゼル

概要・特徴：ダダイズムの影響を受けたスイス人の彫刻家ジャン・ティンゲリーの製作した10点の動く彫刻が設置された池である。動く彫刻は壊れた機械などから集められた部品を組み合わせ、製作されており、噴水のように水を吹き出したり、水面を揺らさせたり、様々な動きを見せる。眺めているとそれぞれが生きているかのようにも見え、機械同士が何かコミュニケーションをとっているかのようにも見えてくる。大変著名な作品であり、バーゼル市内の中心部の美術館や劇場が立ち並ぶエリアの都市公園にあり、旅行者の見学スポットでもある。(図20)

評価：著名な彫刻家の代表的な作品をいつでも鑑賞することができる優れたパブリックアート・サイトである。池の中に設置されているおかげで、人に触られて破損されるなどの恐れは少ない。市内の中心に位置し、多くの市民の日常に密接な場所でもあり、ここに優れた作品が設置されていることが素晴らしい。



図20 池に配置された動く彫刻

パブリックアートの事例3

名称：インターセクション

アーティスト：リチャード・セラ

ロケーション：スイス連邦共和国、バーゼル

概要・特徴：アメリカ人のミニマリズムのアー

ティスト、リチャード・セラの作品である。同様の作品がニューヨークのMOMAに収蔵されており、この作品は彼の代表作の一つといえよう。高さ4mほどの長さの厚い鉄板が傾きながら弧を描いており、それらが4枚で建物のようなボリュームをかたち作っている。鉄板の間を歩くこともできる。設置場所はジャン・ティンゲリーの噴水のそばで、市の劇場の前の広場であり、人々の待ち合わせ場所などによく使われるロケーションである。この作品は特に人を隔てる囲いがあるわけではなく、誰でも作品に触れることができる。彫刻作品であり、その大きさと形態から絶妙な造形性を楽しむことができる。傾いた鉄板は独特の重みと迫力を感じさせ、鉄という物質のある種の特性を教えてくれる。(図21)

評価：大変著名な作家の代表的な作品である。これに日常的に身近に触れることができることの価値は大きい。派手な作品ではないので、パッと見た目の違和感は強くなく、しかし、揺るぎない力強い造形は強い存在感を持っており、この場所を特徴付けている。



図21 パーゼル セラの傾いた鉄板の作品

3-5.

照明デザイン事例の報告および評価1

名称：GLOW (ライト・アート・フェスティバル)

デザイナー・アーティスト：多数

ロケーション：オランダ王国、アイントホーフェン

時期：2018年11月10日から17日 (18:30から

23:00)

概要・特徴：アイントホーフェンは家電で有名なフィリップ社の拠点都市として発展した街で、近年注目されているオランダデザインのデザイナーを多数輩出しているデザインアカデミー・アイントホーフェンが立地する街でもある。GLOWは2006年からスタートしたライト・アートのイベントである。電球の開発と普及で発展したフィリップス社の存在から、この街は光の街、技術の街とも呼ばれ、照明との強いつながりがある。GLOWは2012年から現在のような街全体を使ったライト・アート・フェスティバルになり、新しい才能を発掘する場になっている。2018年には75万人の観客が訪れ世界でも5指に入るライト・イベントになった。時期は毎年11月に開催されている。2018年は街中の32箇所のサイトとその他関連企画で作品展示が行われた。見学ルートが設定され、マップを手に大勢の人々がこのイベントを楽しんだ。見学参加は無料、マップは駅前のツーリストインフォメーションなどで1ユーロで購入できる。(図22) (図23) (図24) (図25) ⁽⁹⁾

評価：近年よく知られたイベントで夕暮れ時各地から大勢の観客が訪れ、普段は静かと思われる街がお祭りのような賑わいになっていた。作品は多様で、そのほとんどは屋外展示なので街のルート散策の中で次々見ていくことができる。近年注目されているプロジェクトマッピングの大規模な作



図22 GLOWフェスティバルのマップ

品は3箇所あり、とても大勢の人だかりの中、完成度の高い作品を鑑賞することができた。それ以外の光と動きを活用した作品も優れた興味深いものが多数あり、最先端のライト・アートの現状を知ることができた。作品の傾向にまとまった方向性があるわけではないが、設置されている場所の敷地の特徴を生かしたサイト・スペシフィックな作品が比較的多い。また、現象としての光というよりもテクノロジーとしてのライトあるいはオブジェとしてのライトという観点で考えられ制作されている作品が多いように感じた。アーティストがしっかりとコントロールすべき対象物としてライトを扱っていることを感じる作品が多く、静かに光を鑑賞し体を委ねるというよりも、鑑賞者がしっかりと対峙して意識的に読み取るべきものとして作られている。この点は欧米の他のアートと全く同じであると感じる。一部ではギャラリー

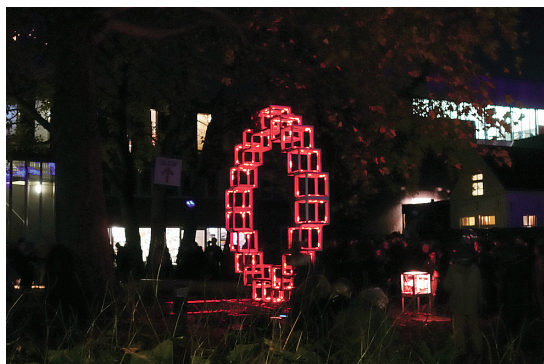


図23 円形に並んだキューブ状の色と動きが変化を続ける作品



図24 建物上部を中心に広範囲にわたりブルーの光が遠方からも見える作品

空間を使用した屋内展示もありそこでは著名なアーティストによる光を活用した作品も展示されており、それらとの比較という視点もこの企画には含まれていると考えていいだろう。オランダは緯度が高い国で11月で17時くらいにはかなり暗くなるのでライトアートの屋外展示にはふさわしい。アイントハーフェンは他の周辺のよく知られ



図25 大聖堂のファサードの形態を生かしたプロジェクションマッピング作品



図26 アイントハーフェン中心部の広場

た街に比べると観光資源はやや乏しい街であると考えられる。早く暗くなり室内にこもりがちな季節にライトを活用したイベントにより街に出てくる人を増やし、街の特徴を活かし観光客の増加にも結びつけることに成功している。街の雰囲気はヨーロッパの街にしては近代的で軽い印象の建物が多く日本の都市景観に似たところもあり、日本でもし同様なイベントを行ったらという想像上の比較が行いやすいと感じた。(図26)

照明デザイン事例の報告および評価2

名称：アムステルダム・ライト・フェスティバル
デザイナー・アーティスト：多数

ロケーション：オランダ王国、アムステルダム

時期：2018年11月29日から2019年1月20日
(17:00から23:00)

概要・特徴：2012年から開催されているヨーロッパで最も大規模な国際的なライト・フェスティバルである。2018年は「メディアはメッセージである」というテーマで世界各国から600組以上のアーティストが作品提案を行い、日本人作家作品も含む30作品のライト・アートが選ばれてアムステルダム中心部の歴史的建造物のエリアに屋外展示された。各作品はライト・アートをメディア・媒体としてアムステルダムの都市の特徴、歴史、建築、特徴的な住まいなどテーマとしており様々な切り口や表現方法で制作している。作品はヘーレン運河沿いを中心に市内中心部をぐるっと回遊するルートに沿って配置されており、運河を遊覧できるクルーズ船から鑑賞することもできる。徒歩での鑑賞は無料、クルーズ船は乗船料必要、マップは2.5ユーロで購入できる。(図27)(図28)(図29)(図30)⁽¹⁰⁾

評価：街の特徴である運河とその景観を活かしたライト・フェスティバルである。鑑賞方法は徒歩、自転車、船から選ぶことができる。筆者は地上から街を歩きながらの鑑賞と、船上での運河の上からの鑑賞の両方を体験し、それぞれ興味深く感じた。作品が配置されているルートはゆっくり歩く

と4時間ほどかかる結構な距離があるが、船上の約1時間のクルーズのおかげで、高齢者や子供連れの人々も鑑賞しやすくなっている。作品の多くはサイトスペシフィックな作品で、運河や港湾施設、街の歴史などこの街の特徴を作品に取り入れ



図27 運河を渡る橋に取り付けられた構造体のような形状の作品



図28 小さな蜘蛛の集積でできた大きな蜘蛛の作品
橋の上に設置されている



図29 人間の脳内のニューロンの形と情報伝達の動きを運河の上で巨大化して見せた作品



図30 ライトフェスティバル ガイドマップ

たものが多い。従ってこの期間にこの場所に来て鑑賞することにこそ意味が生じる。近年日本でも各地で開催される地域の芸術祭と同様、観光を盛り上げる効果を持つ都市型芸術祭であり、通常の観光ルートやスポットを巡るだけではアクセスしにくい未知のアムステルダムをよりよく知るきっかけになりうるイベントである。作品設置は安全性などクリアしなければならないためハードルは低くなく、その上でうまく完成させていると感じた。大都市でのイルミネーションはきらびやかに彩るだけでも十分魅力的になるが、その段階で満足せず最先端のライト・アートという方針での数々の作品が点在する様子は、観客にとってはあちこちで「なぜ?」「これは何か?」という疑問を抱かせるきっかけになる。ヨーロッパの都市において現代アートの芸術祭的イベントには十分な歴史があり、それを踏まえた形でのライト・アートを手法とした優れた芸術祭イベントであると感じた。筆者にとってもライト・アートとはどうあるべきかを改めて考えさせてくれる機会であった。

4. まとめ

ヨーロッパ都市のパブリックスペースにおけるアーバンファニチャー等の造形物及び最新の照明デザイン状況の調査・研究を、現地での実地調査を中心として実施した。選定した事例は現時点では網羅的とは言えないが近年のパブリックスペースのデザイン傾向を代表する事例を取り上げることができた。共通しているのは既存の環境を活かし、それらと新しい要素との相互作用によってより魅力的になるように計画し、歴史的文脈など過去と現在と未来を繋ぐことを意識したデザインが実現されていることであろう。本報告では特に取り上げなかったが、今回の研究期間において視察することのできた数多くの新しい建築物のデザインにも同様な視点、計画が観て取れた。

本研究で取り上げた事例は本格的な建築物も一部含むが、多くは既存都市環境に対してのより軽微で付加的な操作により実現しており、それらに関わる費用も大開発に比べれば明らかに軽微であるが、十分な効果を出しておりコストパフォーマンスに優れていると考えられる。このような手法は今後の我が国の都市デザインにももっと取り入れるべきであるが、プロジェクトなどとして成功させるには、まず前提として既存の都市環境を丁寧に読み込み尊重し、時間的に長期スパンで計画する視点が不可欠であると感じる。今回の研究では以上のように実体験に基づく知見といくつかの有益な視点や気づきを得ることができたが、より正確な分析評価のためには、個々の事例についてのさらなる調査と、より広く多くの事例の調査も必要であろう。

謝辞

本報告は九州産業大学国外研修助成により執筆することができました。また今回の訪問にあたり、関係者の皆様の多大なるご協力をいただきました。関係各位に厚く謝意を表します。また、受け入れていただいたインスブルック大学建築学部のガブリエラ・サイフェルト・カヴァン教授にも深く感謝申し上げます。

引用、参考文献

- (1) インスブルック観光局Webサイト
<https://www.innsbruck.info/en/>
- (2) Bernhard Aichner “INNS’BRUCK”, HAYMON,
Innsbruck-Wien, 2016
- (3) インスブルック大学Webサイト
<https://www.uibk.ac.at/index.html.en>
- (4) “Public Art-Urban Space”, DESIGNERBOOKS,
Hong Kong,
- (5) 『セビリア・伝統と芸術の街』dosde, Barcelona, 2018
- (6) “ART+SCAPE!”, Dopress Books, Hong Kong, 2011
- (7) ベネチア・ビエンナーレ2019Webサイト
<https://www.labiennale.org/en/architecture/2018>
- (8) ヴォ・チョン・ギア アーキテクトWebサイト
<http://votrongnghia.com/>
- (9) GLOWライト・アート・フェスティバルWebサイト
<https://www.gloweindhoven.nl/en>
- (10) アムステルダム・ライト・フェスティバルWebサイト
<https://amsterdamlightfestival.com/en>

図1～30 全て筆者撮影